

13) 横浜三島堂病院略史

On the Mishimado Hospital in Yokohama

横浜市・鶴見皮泌科医院 中西淳朗

Atsuo NAKANISHI

かつて横浜市内に三島堂病院という医療機関があった。昭和16年発刊の『横浜市医師会史』収載の会員名簿をみると、神奈川区桐畑二十九番地に所在し、小児科、外科、皮膚科、花柳病科を標榜する病床数18の、今日でいう有床診療所である。

鶴見の名主・佐久間權蔵の日記（横浜開港資料館発行、佐久間權蔵日記第一集）の、明治43年9月6日から7日にかけて、神奈川反町のK子が腹痛を来し、三島堂に診療を乞うたという記事がのっている。即ち、明治末に存在していた医療機関であり、反町遊廓周辺の住民が主たる患者であったようである。

神奈川区桐畑の三島堂病院とは別に、瀬谷区阿久和東町に現在も三島堂医院が存在しており、院長の神山幸雄氏に問い合わせたところ、一族の相沢氏の先祖に高次郎という人がおり、横浜に出たと聞いているがもはや交流はないということであった。

そこで明治42年発行の『日本杏林要覧』を調べたところ、該当地に松沢高次郎医師を見いだした。この本によって、高次郎氏は神奈川県の平民、文久2年生れで明治21年6月に医術開業試験に合格した医師であることが解った。

桐畑二十九番地という土地は、『横浜市土地宝典・神奈川区之部・昭和六年』によれば所有者は松沢 晃氏となっている。これによって、高次郎氏は医術開業試験合格後に松沢家に養子に入ったと考えられた。前出の神山氏のご教示により阿久和の三島堂を名のる医家は相沢氏が本流で、一族に医師が多いことを知った。

そもそも三島堂という名称の出所は、武蔵国入間郡三ヶ島（現、埼玉県所沢市三ヶ島町）の赤門眼科に由来する。正式名は「三嶋館」で、江戸末期の引札によると本道、外科、婦人科、小児科の療治も門人に教えたとある。

赤門眼科が名高くなったのは六代目鈴木一貫からで、白内障の手術が巧みであったと云われてい

る。この赤門眼科は出張所をもっており、江戸麹町には鈴木秀庵、入間郡林村には佐久間三折、入間郡久米村には小嶋宗順、相州鎌倉郡阿久和村に山崎道元という弟子を配している。

この山崎道元は三ヶ島の石井家の次子であったが、阿久和の相沢家に入り相沢道玄と名のり三島堂医院を開いた。長男道碩、次男高次郎、三男益造らみな医師となり、道碩、益造は医業にはげむかたわら村長を勤めた。

高次郎氏の死去した年は明確ではないが、大正14年夏に都筑郡川名村出身の前田 実医師が、神奈川の桐畑で三島堂医院を引き継いでいるので、高次郎氏は関東大震災の折に死去されたとも考えられる。

前田 実氏の家は蘭方外科と伝えられており、父収治氏は慶応3年生れで、医術開業試験を明治22年9月に合格している。即ち、前田収治と松沢高次郎とは同時代の人で、川名周辺の医家はその当時、神奈川宿に分院を作りたいという願望を強くもっていたので、大正年間に松沢、前田両家の接触があったと考えられる。

三島堂を継いだ前田 実の妻は、かつての東京大学総長の茅 誠司氏の妹で、彼女の兄・鏑三氏は昭和34年に三島堂を継いだ。

この前田家と茅家との接触については明らかではない。前田 実は明治25年生れで、大正11年に新潟医専を卒業している。そして開業をする一方で、昭和14年に医学博士となっている。実は同18年に生家にもどり父収治の医業を手傳い、20年に父祖三代の医を継いだが、桐畑の三島堂病院は戦災で焼失した。

その後を茅氏が継いだ訳であるが、何故か昭和40年頃に茅氏は隣町に移転し、立神高郎医師が桐畑に三島堂外科医院を開いたが、約10年で転地し三島堂の名は桐畑から消えてしまった。

三島堂病院初代の松沢高次郎医師の学習をうかゞわせる遺品がひとつある。それは“横浜三島

堂文庫之印”が押されている「明治講医会講義録」
—合本—（表紙に明治二十七年八月卅一日発行と
ある）で、その内容は、北里柴三郎のペスト病の
原因調査第一報告（明治27年7月）と、青山胤通
の香港に於けるペスト調査の略報、この2篇であ
る。即ち、医術開業試験に合格したる後も、かゝ
る会に在籍して勉強し、新知識を吸収していたこ

とが判明した。

このパンフレットの出た1年半後の明治29年
3月30日、横浜港に入港した英国船に乗っていた
ペスト患者が上陸し、町医者の中隆千氏（試験
合格医）がペストの疑大なりと診断した史実とつ
き合せてみると、当時の臨床医の学習欲が著しい
ことが良く理解できるのである。